別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：李　漢正
論文題目：表現における越境と混淆　－　谷崎潤一郎と日本語　－

李漢正氏の博士学位請求論文、「表現における越境と混淆　－　谷崎潤一郎と日本語－」は、小説家谷崎潤一郎において日本語がどのように認識され、その認識が谷崎の書くという行為とどのように結びついていたかという問題意識に基づいて、従来の研究では、主として谷崎の関西移住及び所謂「日本回帰」と結び付けられて論じられることの多かった『文章読本』の再解釈を試み、この著作が作家の創作と深く結びついていたことを、同時代に発表された作品「三人法師」、「蘆刈」、「春琴抄」、『細雪』などにおいて考察しようとするものである。そして、谷崎において日本語の問題が、彼の作家活動の早い時期から一貫して日本語で書くという課題と不可分のものとして自覚されていたこと、従ってまた『文章読本』が単なる文章作法を述べただけの著作ではなく、日本語で書くことに対する尖鋭な意識によって支えられ、谷崎の創作活動の展開に重要な意味を持っていたことを論証している。

李漢正氏の論文は５章より成り、それに「序論」と「結論」が付けられている。全編を通じて『文章読本』は、各章の主題に応じてさまざまな側面で参照される主軸となっている。また、氏の作品分析は、文学的エクリチュールの主体としての<書き手>に視点を置く新しい方法を提示することにもなっている。以下、論文の構成に即して、各章の議論を紹介し、随時審査委員の指摘を記しておく。

「序論」において、李漢正氏はまず本報告書冒頭に述べたような問題意識を提示する。ついで、『文章読本』に関する先行研究の批判的検討を行ない、特に「言文一致」の運動との関連に注目しながら、谷崎において日本語で書くことの問題性が自覚される状況と経過を論述する。そこから、「一人の書く主体としての谷崎」を浮かび上がらせ、「同時代の日本語の変革に反応した」作家として谷崎を捉え直す。

第一章は、「谷崎と同時代の日本語」と題され、１９２９年に発表された「現代口語文の欠点について」に焦点を絞った分析が行なわれる。まず谷崎の置かれた状況を「日本語変革期の作家たち」の中に位置づけ、西洋近代文学との対比のなかで日本語が新しい文学言語となるための苦闘とさまざまな試みを通じて、やがて日本語で書くという課題が作家谷崎のうちに立ち上がって来たことが示される。

「序論」と第一章で呈示された問題設定、提示された資料体、分析の方法などが、第二章以下の論述の基礎となっており、この箇所に関して審査委員との間に、用語法、資料体の切り出し、時代背景との関係、分析方法などについて活発な質疑応答が行なわれ、李漢正氏の見解が確認されると同時に、概ね妥当なものとして了承された。

第二章、「言文一致体を越えて」では、同じく１９２９年に発表された作品「三人法師」が分析の対象とされる。形式的には「三人法師」は室町時代の一篇の御伽草子を現代日本語に翻訳したものであるが、その中世日本語の翻訳によって、谷崎が「言文一致」という規制的枠を越えて、西洋語文脈のうえに日本古典語の要素を加えて、文学言語としての日

本語の新しい可能性を発見したことが論証される。

第三章は、「引用と書くこと」と題され、具体的分析の対象となる作品は1932年に発表された「蘆刈」である。ひらがな表記を多く用い、句読方式も常用とは異なるこの作品の特異な表記に注目し、それらが明確な意図をもって遂行された、書く主体の意識的な制作意図に基づくことが、改稿のプロセスの精密な分析によってみごとに論証されている。日本語表記と作品の語り構造との関係性をもう少し前景化できなかったかとの指摘もなされたが、「蘆刈」という作品においては、書く主体の言語的操作が日本語表記を現出させ、作品の重要な成立要因になっていることは、審査委員全員の等しく首肯するところであった。

第四章は「仮想の古典」と題されて、１９３３年に発表された「春琴抄」が取り上げられる。スタンダールの「カストロの尼」やトマス・ハーディの「グリーブ家のバアバラの話」など、谷崎がこの時期に試みた創作的な翻訳の試みを手がかりとして分析が進行する。「カストロの尼」と類同の偽装された古典作品という装置（「春季抄」では『鵙屋春琴伝』と仮想の古書）が、「春琴抄」の作品構想の着想においてだけではなく、日本語の新しい表現の開拓にまで及んでいることが、具体的なテクスト分析を通じて論証される。但し、本章は他の章に比べれば論証に用いられた紙数も少なく、やや物足りなさが感じられるが、論証の趣旨は十分に展開されており、重要な問題提起を内包している点は評価されるとのコメントが審査委員からなされた。

第五章は「日本語内の越境」と題され、作品としては『細雪』が取り上げられる。標準語に対する関西方言、地の文と会話文、随所に引用される手紙文など、この作品が示す日本語の多様な様相に着目し、同時代の言語・文化統制とは逆向きに、この作品が日本語の中での自由と個性の実現される場となっていることが描き出される。語りの内容ではなく、語りの言語的様相に着目する分析は斬新であり、この作品及び書き手としての谷崎に新しい光を当てるものであると評価できる。しかし、それはなお『細雪』という巨大な作品の一部であり、本章で得られた成果を踏まえつつ、谷崎の戦後作品をも含めた分析によって、さらに高い次元での包括的な研究を促すものであるとの指摘が審査委員からなされた。

そのことは、「結論」において本論文の総括及び成果の点検を行なうなかで、李漢正氏自身によっても今後の課題として明確に認識され、また審査冒頭の補足説明でも明言されていた。

総合的にみて、谷崎の作品と『文章読本』とを「日本語で書くこと」という新しい問題意識で関連づけ、具体的な作品において谷崎の「日本語で書くこと」の実相に迫ろうとした本研究は、谷崎研究のみならず日本近代文学研究に新知見を提供するものであり、本論文のもっとも評価すべき点であること、またそれを明快な論述と具体的な分析で示しえたことは、李漢正氏の研究者としての高い見識と研究能力を証明するものであること、それが審査委員全員の一致した見解であった。

以上の審査の後、審査員全員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、本論文が李漢正氏に博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。